
東方恋短冊

カーテンコール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方恋短冊

【Nコード】

N5938V

【作者名】

カーテンコール

【あらすじ】

世界は1本の大樹である。可能性という枝により無数に分岐するそれらは『並行世界』と呼ばれ、本来交わる事は無い。

これは、『あらゆる並行世界に存在する程度の能力』を持った青年が織り成す、様々な恋物語。

白紙（前編）

「ふーっ……重かった」

長い石段を登り終え、鈍い音と共に担いでいた米俵を下ろした。

見るからに高価そうな黒いロングコートを着込んだ青年は、肩に藁屑がついている事に気付くと、それを丁寧に取り払う。

「霊夢の奴、米一表買つて来いとか馬鹿だろマジで……ここから人里までどれだけ距離あったと思ってんだ」

「こつ言つ時に空が飛べないと不便だな……と、ひとりごちる。

「……出来ないもんはしょうがねーか」

ふるふるとかぶりを振り、再び米俵を担ぎ上げる。

そして、『博麗神社』と書かれた鳥居を潜り抜けた。

青年……赤柄あかつかわたる 渉は、社の縁側で茶を啜っている少女を見付けると、そちらの方へ歩を向ける。

そしてその少女が渉に気付いて顔を上げるのとほぼ同時に、彼女に声を掛けた。

「米と、あと晩飯の材料。買って来たぞ、霊夢」

「そ、ご苦労様。適当に仕舞っというて」

何故か腋のあいた巫女服に身を包んだ少女……博麗霊夢は、素っ気無さ気にそうとだけ言っと、再び茶を啜り始める。

それに対し、渉はやれやれと言わんばかりに肩をすくめ、そのま

ま食料庫の方に向かう。

霊夢が素っ気無いのはいつもの事。

別に気にするほどの事でもなかった。

「っと……」

粗方の物を仕舞い終えた涉は、こきこきと肩を鳴らす。

と、また肩に藁屑がついている事に気付き、それを取り払う。

涉の着ているコートは、まだ彼が外の世界に居た頃買った有名ブランドの物で、涉が一番大事にしている私物だった。

過剰とも言えるほど丁寧に藁屑を払い除けると、彼は再び境内に出る。

先程と変わらず、霊夢は茶を啜っていた。

「……………」

「……何？ こっちをじっと見て」

ぽけっと空を眺めている彼女を見て、いっぺん小突いてやるうかとも思う渉であったが、生憎と相手は博麗の巫女。

戦闘能力どころか霊力の欠片も無い自分に勝ち目は無いと、早々に心中で諦める。

「何でもない。……茶、俺もいいか？」

「好きにすればいいじゃない」

愛想の感じられない返答。

しかしまあ、そんなもの慣れっこの彼は特に気分を害する事無く、霊夢の隣に腰掛けた。

湯飲みに茶を注ぎ、そして彼女と同じように視線を空へ向けた。

どこまでも青い空を見て、一言。

「……………平和だなー」

「そうね」

「……………」

不意に思い出されるのは、自分が初めてこの地、『幻想郷』に至った日の事。

ある日何の前触れも無く迷い込み、当ても無く彷徨い。

そして、おぞましい姿をした妖怪に襲われた。

平和ボケした国で生まれ育った涉に、成す術等ある筈も無く。

追い詰められ、喰われ掛けて。

そして救われた。

他ならない、いま自分の隣に座る少女。博麗霊夢に。

眩いほどの弾幕で、自分が抗う事さえ適わなかった妖怪を吹き飛ばし、そして一言。

『生きてるー？』

そんな、気の抜けるような問い掛けをされた事は、今でもありありと覚えている。

鮮烈だった。

辺りに漂う霊力の残滓がきらきらと輝く中、宙に浮かんだ彼女の姿は、ただただ美しかった。

そう。言ってしまえば、一目惚れだったのだ。

その後、霊夢から幻想郷^{この世界}について聞かされた俺は、迷わず残る事を選んだ。

そして博麗神社^{ここ}に住まわせて貰える様に頼み込んだ。

『恩を返したい！ 役に立つからここに置いてくれ！』

少しだけ嘘だった。

助けられた恩を返したい、と言うのも勿論あったが、俺の心の大半を占めていたのは『惚れた女の傍に居たい』と言う思い。

何とか霊夢を説き伏せた俺は、多分その時人生の中でも1番か2番目に喜んだと思う。

彼女は思った以上に我がままで面倒臭がりで人使いも荒かったけれど、そんなのはどうでも良かった。

俺は紛れも無く、博麗霊夢に恋しているのだから。

どんな形でもいい。彼女の傍で、彼女の役に立てるなら。

それだけで、俺は幸せなのだから。

「……ふー」

隣でまったりしている霊夢をちらと見て。

そして思わず。

「なあ、霊夢」

「……何？」

特に考えも無く声を掛けた俺は、思っていた事をそのまま口に出した。

「……………腋、寒くないか？」

直後、御被い棒で叩かれた。

こつ言う所は理不尽だと思う。

白紙（後編）（前書き）

後半です。

白紙（後編）

博麗であるが故に……。

赤柄渉はぼんやりと、空を眺めていた。

いつもなら青々とした空模様、若しくは雨の降り注ぐ鬱屈とした
天気。

そのどちらかである空は、しかしどちらでもなく。

赤い霧に、覆われていた。

「異変……か」

ポツリと呟かれる声には、覇気が無い。

霊夢は先程、この異変の解決に乗り出して行った。

『夕飯までには戻るから、用意しておいて』

そう言つて霧の中を飛んで行った彼女の後姿を思い出し、渉は小さく溜め息を吐いた。

……霊力を持たない俺では、彼女の役には立てない。

異変解決などと言う危険の伴う事から、惚れた女一人守れない自分の無力さが忌まわしい。

「……………」

いや、そうではない。正しくは、それ……ではない。

渉は先程から視界の隅をちらついている『それ』に向かって、ぼそりと声を掛けた。

「何してんだ、出て来いよ」

「……………あら」

その刹那、彼の視線の先にある空間に、大きく亀裂が走った。

そして亀裂は大きく裂け、無数の目に包まれた『スキマ』が姿を現す。

「よく気付いたわね？」

スキマの中から、出て来た人影。

腰まで届くような金髪に、風変わりな服装。

渉はその人物を知っていた。

とは言っても、会ったのはほんの10回にも満たないが。

「よく言う。さっきから顔を出したり引っ込めたり、何がしたいんだ」

「たまには趣向を凝らそうかと思ったの」

「たまについて言うほど会った事ないと思うが」

霧が出ていると言うのに、日傘を差したその女性。

八雲紫に、渉は冷めた視線を向けた。

「……何の用だ？」

「あら、客人にお茶ぐらい出してくれないのかしら」

「……何の用だ？」

「……………嫌われてるわねえ」

僅かに眉尻を下げ、さも困ってますと言いたげな仕草をする紫。

けれど渉は頑として態度を変えない。

そのまましばし視線ががち合う。

……先に折れたのは、紫だった。

「はぁ……私が何を言いに来たか、分かってるでしょう？」

「ああ、分かっている。そしてそれに対して反論する気も無い」

「あら素直。普通こう言うのって、もっと抵抗したりしない？」

首を傾げた紫に、渉は舌打ちする。

「散々悩んださ。どうにかならないかと考えもした」

「……………そう」

「受け入れることは出来なかった。理解する事は出来なかった。けど……認めるしか、無かった」

言葉が終わりに近づくにつれ、小さくなる。

最後には項垂れた彼に一步、近づく紫。

そして――

「…………リミットオーバーよ。昨日、『外』で候補者を見付けたわ」

「っ……………！」

渉が、1番聞きたくなかった言葉を。

「博麗の巫女を娶るべき、強い霊力を持った外来人を」

はつきりと、口にした。

赤柄渉が八雲紫と初めて出会ったのは、彼が博麗神社に住み着いて半年が経とうとした頃だった。

『初めまして、赤柄渉。今日は、貴方に伝えることがあって来たの』

初対面だった渉には知る由も無かったが、彼女は何時もの胡散臭い笑みを浮かべていない、彼女を良く知る者が見たら些か以上に驚くであろう真剣な顔付きだった。

それは、そう。博麗の巫女を誰よりも大切に思う紫の、心から霊夢を愛する者へのせめてもの礼儀だったのだろう。

『貴方と、霊夢が結ばれる事はない』

渉が啞然とする中、紫は更に言った。

常に中庸で在らねばならない巫女を娶るのは、幻想郷と関わりを持たない外の人間が相応しい。

そして次世代の巫女に確実に強大な霊力を受け継がせる為に、夫となる人間もまた強い霊力を持つていなければならない。

それは固い決まり事。

博麗の巫女が代々守り続けてきた、鉄の掟だと。

曲げてしまえば、幻想郷の安寧が崩れてしまう。

それを聞いた渉は、少しの間息さえ出来なくなった。

涙さえも、出なかった。

「……………そう、か」

紫の言葉に、渉は微かに震えていた。

噛み締め過ぎた唇から、つうと赤い血が零れる。

「そいつは……………いつ、幻想入りさせるんだ」

「準備はもう出来てるわ。明日にでも」

生涯の伴侶とさせるべき相手。

出会いは、早い方が良い。

「霊夢は……………」

「あの子は何も知らないわ。……………あくまで偶然を装わせるけど」

「すぐにばれるだろうな……………アイツ、すげー勘が良いから」

力ない笑い声。

瞬く間に生気が欠けてしまった渉を見て、紫は思う。

……ああ、彼は本当に霊夢を愛してくれていたんだと。

「ここには……居られなくなるな」

「ええ……」

音も無く、渉が立ち上がる。

その様はまるで、幽鬼の様であった。

「どこ、行こう……」

「……永遠亭はどうかしら？ 確か、永琳から誘われていたでしょう？」

それにあそこの姫は、渉の事を気に入っていた筈。

けれど彼は、ふるふるとかぶりを振った。

「いや……決めた」

……外に、帰るよ。

渉のその言葉に、紫は目を見開く。

「……本気なの？ 貴方がこっちに来てから、もう2年は経ってる……とつくに死亡扱いになっているわよ。今から帰ったって、居場所なんか……」

「なら、俺に霊夢が他の男と結ばれるのを黙って見てろと？ ……無理だよ。下手したら俺は、そいつを殺しちゃっ」

「……………」

「まあ……元々見込み無かったんだよな。霊夢は俺に素っ気無かったし……どうせ俺の事なんか、面倒な居候ぐらいにしか思ってたろうよ」

「……………」

紫は彼に、言葉をかける事が出来なかった。

「居場所なんか無くていい……霊夢の傍に居られないなら、いつそ会えなくなっただ方がいい……」

唇から流れる血が顎を伝い、地面に落ちる。

それはまるで、涙の代わりのようだった。

赤い霧を起こしていた吸血鬼の一派を黙らせた霊夢が神社に戻ったのは、夕暮れ時だった。

疲れた体で伸びをしつつ、本殿に入った。

「ただいまー。涉、ごはん」

こんな風に食事を催促すれば、「あと少しだからその茶菓子でもつまんでろ!」と声が返って来る。

そんな日常が、霊夢は好きだった。

「……………」

しかし、いつまで経っても声が聞こえてこない。

不審に思った霊夢は、ひょいと台所を覗いた。

誰も居ない。

「？ わたるー？」

神社の中を探すも、姿が見えない。

もしや疲れて寝てしまったのだろうか？

文句を言いながらも結局は何でもしてくれるものだから、最近は何々頼み過ぎたかと思いつつ、霊夢は彼の部屋に向かった。

「わたるー」

部屋の戸を開ける。

しかしそこにも居ない。

流石に不安になってきた霊夢だったが、ふと部屋の中に置いてあったある物に気付く。

黒いロングコート。涉が大切にしていた物だった。

自分達二人の食費ひと月分より高価たかいんだぞと、自慢された事を良く覚えている。

霊夢は安堵した。彼がこれを置いて遠くまで行く筈がない。

けれどその時、丁寧に畳まれたその上に一通の手紙のような物が置かれている事に気付いた。

『霊夢へ』

割と達筆な字で書かれたそれを、霊夢は手に取る。

胸から吐き気のように込み上げて来る嫌な予感を飲み込んで、紙を開いた。

書かれていたのは、たった二言。

『世話になった。
しあわせになれ』

たったそれだけ。

けれど霊夢は理解した。

もう、涉がここに居ない事を。

「……………どう……………して……………」

私かわがままばかり言っただから？

ついつい冷たく接してしまったから？

だから私のところが嫌になったの？

「……………っ」

ぼろぼろと。

自分でも気付かない内に、涙が零れた。

「……う……うえ………」

嗚咽が漏れ出る。

渉が居ない。

それだけで、悲しみが堰を切って溢れて来た。

「わた、る………」

手を伸ばし、彼のコートを抱き締めた。

ぐしゃぐしゃになってしまったが、それでも構わない。

怒られたっていい。戻って来てくれるなら。

けれど、渉が帰って来ることは無かった。

眠る事さえ忘れ、霊夢は一晩中泣き続けた。

「……寒いわね」

縁側で熱いお茶を啜りながら、霊夢は忌々しげに空を見上げた。

暦の上ではもうとつくに春へと突入してるにも拘らず、空からは雪が降ってきている。

かたかたと小刻みに震えながら、霊夢は再び呟いた。

「寒いわ……」

「んー、腋のあいた服を着てたら当然だと思うけど」

不意に横から聞こえた声に、霊夢はじろりと視線を向けた。

「……うるさいわよ。私の勝手でしょ」

「あ、あはは……」

困ったような笑みを浮かべた少年を、霊夢はより一層強く睨み付ける。

が、やはり寒さには適わず、くちつと可愛らしいくしゃみをした。

それを誤魔化す様に、台詞を捻り出す。

「……やっぱり異変よ、これは」

「異変？」

聞き慣れない言葉だったのか、少年が首を傾げる。

……そう言えば、コイツがここに来たのは1番最近の異変の後だったわね。

霊夢は心中で呟き、そして「1番最近の異変」の件で痛みを訴える胸を押さえた。

「……………わたる」

あれ以来、渉は姿を見せなかった。

当然幻想郷中を探した。紫を問い詰めたけれど、アイツは何も教えてくれなかった。

そして、まるで渉と入れ違うように、この男が姿を現した。

私はコイツが嫌いだった。コイツの存在が、渉の居場所を奪ってしまう気がした。

勘でしかないけれど、渉が居なくなっただのはコイツの所為だと思っただ。

「霊夢？　どうかした？」

「……………何でもないわ」

これ以上コイツの近くに居たくない。

そう思った霊夢はお茶を全て飲み干すと、勢いよく立ち上がった。

「行くわ。アンタは帰りなさい」

「え？ あ、でも付いて行っちゃ駄目かな。最近は大分飛べるようになったんだ」

そう言って、少年はふわりと浮かんだ。

けれど霊夢の目は、ますます険悪になるばかりだった。

「いいから帰りなさい。私一人で十分よ」

霊夢は1度本殿に入ると、壁にかけたコートを取った。

…… 渉が置いて行った、黒いコートを着込む。

「……………」

今となっては、これだけが霊夢と渉を？ぐものだった。

巫女服の上にロングコートと言うアンバランスな格好をした彼女を見て、少年は首を傾げる。

「ねえ霊夢、その組み合わせ変じゃない？ それにそれ、明らかにサイズが——」

「うるさいわ。私の勝手でしょ」

取り付く島さえなく、踵を返す霊夢。

コートを着ただけで、先程までの寒さが嘘のように無くなっていた。

はたはたとコートの裾をはためかせ、霊夢は宙に浮き上がる。

「……………」

そして全てを振り払うかのように、凄まじい速さで空を駆けて行った。

戻って来るよね、涉……。

だってこのコート、アンタの大切なものなんですよ？

アンタが帰ってくるまで、私が預かっておくから。

だから……。

「早く、帰ってきてよ……」

雪に混じった一滴の涙に、気付くものは無かった。

白紙（後編）（後書き）

博麗霊夢編、終了です。
駄文で申し訳ありません。

『ずっと一緒に』 1 (前書き)

今回は、不老不死のあの子。

朝日が昇りきらない早朝、一人の少女が竹林を歩いていた。

「らん ♪ らんらん ♪ ららん ♪ ららん ♪」

鼻歌を歌いながら、この上なく嬉しそうにしている少女は、その場でくるりと一回転する。

きれいな長い銀髪が、ふあさつと棚引いた。

「らん ♪ ……あ」

ふと視界に入った水溜りに足を止め、少女はそれを覗き込む。

澄んだ水に映るのは自分の顔。

髪を自らの手で梳り、寝癖などついていないか確認する。

「……よしっ」

身嗜みが十分に整ったことを確認すると、少女は大きく頷いた。

……見られるのなら、少しでも綺麗な自分を見て欲しい。

頭の中で不意にそんな事を思った彼女の顔に、少しばかり朱が差した。

周りには誰も居なかったが、照れ隠しに笑みを浮かべる。

「ふふっ……」

もし彼女のこの一連の様子を、かの永遠亭の主が見ていたらどんな反応を見せるだろうか。

ものも言えないほど啞然とするか、腹筋が筋肉痛になるまで爆笑するか。

それ程に、今の彼女……藤原妹紅の様子は、普段とは異なっていた。

「……………あつ」

竹林を抜け川に出た妹紅は、小さく声を零す。

視線の先では、一人の青年が背の高い岩に腰掛け、竹製の釣竿を振っていた。

「っしゃ……………今日は大漁だな、これで6匹目だ」

春だと言うのに、黒いコートを着込んだその後姿。

見間違える筈も無い。

妹紅は笑顔を綻ばせると、河原を駆けて。

「おはようっ、涉！」

会いたかったその人に、後ろから声をかけた。

「……ん？ 妹紅？」

背中から響いた声に、赤柄渉はひょいと後ろを向く。

見慣れた少女が、笑顔でそこに居た。

「ふふっ」

「？」

視線が合つてすぐ、より笑みを深める妹紅を見て首を傾げる渉。

何がそんなに嬉しいのだろう、と考える。

妹紅としては声だけで気付いて貰えた事が嬉しかったのだが、あまり鋭い方ではない渉がそれに気付く筈も無い。

魚を収めたクーラーボックスに竿を立て掛け、彼は岩から下りた。

「どうしたよ、お前も釣り……って訳じゃ無さそうだな」

見たところ手ぶらの妹紅を見て、渉がそう言う。

妹紅はくすりと笑うと、彼を指差した。

「貴方に会いに来たの」

「……俺に？」

「そう」

「……………そうか……………」

あまりにストレートの彼女の物言いに、赤くなる渉。

が、ふと気付く。

「いや、けどどうして俺がここに居るって分かったんだ？」

渉にとって確かに早朝の釣りは日課のようなものだったが、釣り場所は毎回気まぐれで決めている。

棒切れを倒した先にあった川で釣りをしたこともあるぐらいだ。

なぜ妹紅は、自分がここに居ると分かったのか。

それを聞くと、何故か妹紅は顔を赤くして目をそらし。

「……渉の声なら……十里先でも聞こえるから」

十里〃約39キロメートル。

渉の顔が引き攣る。

些か以上に恐ろしかった。

「なんてのは冗談で」

「……そ、そうか。良かった」

本気で良かった。

非常に大事なことだったので、心の中でもう一度呟く渉だった。

「兎に教えてもらったのよ。貴方、竹林を歩く時に適当な兎に道案内させてるでしょ?」

「あー、成程」

得心がいったように、手を叩く渉。

「あ……もしかして、邪魔だった？ 釣りの途中に」

「ははっ、んなことねえよ。それにそろそろ飯にしようと思ったんだ」

そう言っつて、渉は懷から筍の皮で包んだ御握りを出す。

そして先ほどまで座っていた岩の所まで戻ると、魚を収めたクーラーボックスを持ち上げた。

「今日は大漁でな。今から焼くから、お前も食ってけよ妹紅」

「いいの？」

「勿論。ついでに火をくれると有難い」

笑いながら、河原の適当な場所に腰掛ける。

魚を焼く支度を始めた彼を、妹紅は少しの間じっと見据えて。

「……うんっ！」

大輪のような笑顔を、惜しげもなく浮かべるのだった。

『ずっと一緒に』 1 (後書き)

今回は3話か4話構成。

渉と妹紅の最初の出会いは、彼が幻想入りしてすぐの事だった。

「なあ、アンタ。ここは地獄かなんか？」

迷いの竹林の中、傷だらけの姿で横たわった渉を妹紅が見付けたのは、単なる偶然。

腹を空かせた獰猛な妖怪ではなく、他の人間や人外でもなく、妹紅が見付けた。

そんな、奇跡のような偶然だった。

「……地獄じゃないわ。行きたいなら止めないけど、お勧めしないわよ」

「違うのか？ ……ふーん、建造中のビルから大量に鉄骨が落ちて来たんだが、よく生きてたな俺」

そう言う彼の様子は、どこか夢見心地だった。

妹紅は取り敢えず渉を助け起こすと、その場で出来る限りの手当てを彼に施した。

「ここは、幻想郷。貴方の居た世界の裏側に、結界を隔てて存在するもうひとつの世界よ。私の名前は藤原妹紅、よろしくね外来の人」

「……………？ よくわかんね。けどまあ、俺は赤柄渉。よろしく、えっと……………もこたん？」

「な！？ も、妹紅よ妹紅！ もこたんじゃないわ！」

「そーなのかー」

ふざけているのか本気なのか。

そして奇しくも、この幻想郷に住まう妖怪の1人がよく口にする言葉を発した彼を見て。

そのとき妹紅は、彼とは長い付き合いになりそうだと、そんな直感めいたものを感じていた。

渉は妹紅の予感通り、幻想郷に住み着いた。

彼は釣りが趣味だったらしく、毎日のように釣竿を担いで幻想郷中を歩いて回るその姿を、妹紅自身も何度か見かけた。

驚くべき事に、彼は妖怪に襲われる事が無かった。

けれど、出会わなかった訳ではない。

縄張りに入り込んだ者を無差別に襲う気性の荒い妖狼や、人を餌とする土蜘蛛。

妖怪としては下級だが、その分理性もへったくれも無く常人にはこの上ない脅威となるような妖怪に何度も遭遇していた。

だが、それらの妖怪は彼を襲わなかった。

それどころか、人を忌み嫌う妖狼が尻尾を振って彼に擦り寄ったり、凶暴な土蜘蛛が彼を乗せて人里まで送り届けたりするなど、信じられない行動をとったのだ。

妖怪に好かれる。渉にはそんな異才があった。

人里に妖狼を連れ込み、皆の前で『お手』を仕込んで、里を見回っていた慧音に大目玉を食らっていた彼の姿を見て、妹紅は彼に強い興味を持った。

だから、2度目に対面した時は自分から話し掛けた。

「ねえ。その子、貴方を襲わないの？」

「ん？ ……えっと、妹紅だっけ？」

半ば彼のペットと化していた白毛妖狼の背に乗り、森を歩いていたら彼を呼び止める。

直接会ったのは2度目だったが、渉は妹紅の名前を覚えていた。

そのことがやけに嬉しく感じられた事を、妹紅は今でも鮮明に覚えてる。

「知らないの？ 妖狼って本当はすごく危険なのよ。ただの人間だったら、大人10人でも簡単に殺しちゃうくらい」

「……モロはんなことしないぞ」

可愛がっている妖狼を危険扱いされたからか、少しむっとした風

に答える渉。

彼を乗せた妖狼も、こくこく頷いている。

そしてどうでもいいが、白い狼にモ口と名付けるのはなんだか危険な気がする妹紅だった。

「そうね、ごめんなさい。けど本当によく懐いているのね、その子」

「おう。……妹紅も乗ってみるか？」

「えっ？」

動物の背に乗るといのは、妹紅にとってどこか新鮮だった。

「……思ったより揺れないのね」

「モ口の歩き方が丁寧なんだよ」

思えば空を飛べるようになって以来、彼女は生きてきた長い歲月の中で馬にも乗る事が無かった。

のしのしと2人を乗せて機嫌良く歩くモ口の背を撫で、妹紅はくすりと笑う。

……そしてすぐに、複雑そうな顔をした。

「ねえ、渉。大昔の話だけどね、私妖狼の群れに襲われたことがあるの」

「……………おー、そう言えば妹紅は長生きさんだって、慧音さんが言ってたっけ」

妹紅の言葉に驚くまでも無く、微妙にずれた返事を返す渉。

けれど、その後に続いた言葉は、真剣なものだった。

「ん、いや分かってるよ。妖狼がどれだけ怖い生き物なのかも慧音さんから聞いてる。実際人里じゃ、妖狼に家族を食われたって人も居るからな……………」

「クウン……………」

悲しげに鳴くモ口。

妖狼は頭がいい。自分の所為で涉が人里の者から良く思われていない事も、分かっているのだろう。

「けどモロは悪くねえよ。こいつは人を襲わない、もしそうじゃないならとくに俺が食われてる」

「……………」

妹紅は、知らない訳じゃない。

妖怪を里の中に連れ込んだと、涉が周囲から石を投げられるような目に遭った事を。

涉がそんな事をしたのは、少しでも妖怪と人間が仲良く出来ないかと考えた末の行動であった事を。

「モロは何にもしてねえよ。こいつは俺にしか懐かない訳じゃない、妖狼ひとつとっただってこんな奴が居るんだよ」

「……………そうね」

「俺はそれを教えたかっただけなのに……………難しいよな」

皆が仲良しになるってのはさ。

その一言で、妹紅は理解した。

渉が何をしたいのか。

それはそう。きっと彼が思っているのは、かの妖怪の賢者と同じことなのだろう。

「……難しくっても、きっと何時か叶うわ」

渉は、妖怪も妖精も神も人も。

皆が笑って過ごせる世界が欲しいのだ。

「ん……ありがとな、もこたん」

「だからもこたんって言わないでよ!」

「あっはっはっは」

「わふ?」

涉につられて、妹紅の顔にも笑顔が浮かぶ。

そんな彼女が涉に惹かれるようになるまで、
そう時間はかからな
かった。

『ずっと一緒に』 2（後書き）

モロ：体長3メートル弱の妖狼、好物は鳥肉。本来は凶暴で人間に懐かない妖獣だが、涉に大層懐いている。性別は雌、中級妖怪にも引けをとらない強さを持つ。

『ずっと一緒に』 3

恐怖は、狂気となる。

その日は、雨が降っていた。

辺りに際限なく響く雨音。肌寒い黄昏時。

そんな空の中を、妹紅はひたすらに炎の翼を羽ばたかせ、飛び回っていた。

「くっ……」

視界の悪さに毒づく。

その上、火気と相性の悪い水気が辺りに満ちている為か、思うように飛べない。

「渉……！」

森の上空から、渉を探す妹紅。

彼女の表情は焦燥していた。

「妹紅、いるか!？」

降りしきる雨を嫌い、自宅の布団でごろりと横になっていた妹紅。そしてそんな彼女のもとに、血相を変えた慧音が尋ねて来た。

雨の中傘も差さずに走り回っていたのだろう慧音は、身体中びしょ濡れだった。

「慧音？ どうしたのよその格好……待ってて、今何か拭くものを――」

「そんなことはどうでもいい！ それより妹紅、涉を見なかったか！？」

妹紅の肩を掴み、息を切らせながら問う慧音。

その様子にただ事ではないと感じた妹紅は、眉を顰めた。

「……………何があったの？」

「……私の所為だ。私が、里の様子がおかしい事に気付いていればこんな事には…………」

見る見る顔色が青褪めていく慧音。

身体も、明らかに寒さが原因ではなく震えている。

そして更に、先程の問い掛け。

涉を見なかったかと、慧音はそう言った。

「どうしたの、ねえ！ 渉がどうしたのよ慧音！」

きつと渉に何か良くない事があつたんだ。

そう確信した妹紅は、思わず語気を強めて慧音を問い詰めた。

慧音は唇を噛み、ぎゅっと拳を握り締めて。

「……………人里の者達が、渉を殺そうとした」

掠れた声で、そう言った。

思えば、必然だったのだろう。

冷たい雨の中を翔けつつ、妹紅は思った。

人は妖怪を恐れている。

故に、その妖怪をさながらペットのように扱っていた渉を恐れた。

例えそれが、本当は無害な存在だったとしても。

その恐怖を狂気に変え、人々は渉を襲ったのだろう。

「……っ!!」

感じたのは、怒りと悲しみ。

友人である渉を傷付けた人里の者への怒り。

人と妖怪は歩み寄れるのだと、そう直に伝えようとした渉の想いが報われなかった悲しみ。

感情のままに、妹紅は更に加速した。

そして――

「！」

見付けた。

森の中にあつた、少し開けた空き地。

そこに、血だらけで横たわるモロと、渉が居た。

「渉っ！！！」

すぐさま地面に降り、渉へと駆け寄る妹紅。

渉は少しだけびくりと肩を震わせると、彼女の方へ振り返った。

今にも崩れ落ちそうな、そんな顔で。

「……………も、こっ」

「渉！ 大丈夫、傷の具合は！？」

「……………俺は平気だよ」

見ただけでも、決して軽くないと分かる傷跡。

けれど渉はゆっくりとかぶりを横に振り、そして視線をモロへと

向けた。

そう。

既に事切れた、その亡骸へ。

「俺をここまで運んで……そのまま……」

「……………」

「……モロだけだったら逃げ切れた。俺を何度も庇ったから……」

焦点の定まらない目をそれでもモロへと向け、ゆっくりと背を撫でる。

その行為にどんな想いがどれだけ積み上げられているのか、妹紅には分らない。

「……………俺、間違ってたのかな。妖怪と人が仲良くするって、そんなに悪いことなのか…………？」

「それは……………」

違う。そう言いたかった。言ってあげたかった。

幻想郷には、博麗の巫女をはじめとした妖怪と親密な関係を持っている者達も居る。

それに、人里の守護者である慧音だって、半分は妖怪だ。

人と妖怪が手を取り合うことが、悪い事の筈がない。

妹紅はそう思う。

けれど……言えなかった。

「……………」

何を言った所で、モロはもう帰ってこない。

帰っては来ないのだ。

「……………」

雨に打たれ、声を押し殺して泣いている渉。

深い深い傷を負ってしまったであろう彼に、妹紅は。

「渉……………」

後ろから、そっと抱き締める事ぐらいしかしてあげられなかった。

渉は必死で耐えている。

モロを殺した人間を、恨まないように。憎まないように。

自分が人間を憎んでしまったら、モロが報われなくなる。

モロは優しい妖狼だった。人里の子供たちもよく懐いていた。

モロは人間が好きだった。正しくは、渉と出会って人間が好きになった。

渉のお陰で好きになれたのだ。その渉が、人間を嫌ってはいけな
い。

他の誰でもない、大切な家族だったモロの為に。

渉は、憎まないと決意した。

「……………渉」

妹紅は彼の名を呼び、より強く抱き締めた。

妖怪の為に泣ける人。

妖怪の為に耐える事ができる人。

どこまでも優しい人。

この人を守ろう。

そして、この人を愛そう。

この先誰が、彼の敵になったとしても。

私だけは、永久に彼の味方で居よう。

妹紅はそんな想いを確かなものとするかのように。

雨が止むまで、渉を抱き締め続けた。

『ずっと一緒に』 4 END

ぱち、ぱちと。

焚き火が小さく爆ぜる音で、渉は目を覚ます。

「……………ん」

「おはよう、渉」

瞼を開くと、何故か妹紅の顔を見上げていた。

更に、地面へと直に横になっている筈なのに、後頭部の辺りが柔
らかい。

数秒ぼんやりと思案した後、妹紅に膝枕されているのだと気付い
た。

「……悪い。いつの間にか寝てたみたいだな」

妹紅は柔らかな笑みを浮かべると、渉の髪を梳くように撫でる。

それに対し、彼は少しくすぐったそうに目を細めた。

「今、何時くらいだ？」

「昼過ぎよ、お寝坊さん」

暖かい妹紅の手が、渉の頬に添えられる。

気分が、とても穏やかになった。

2人は火の後始末をした後、竹林の中を肩を並べ歩いていた。

「済まないな、わざわざ送って貰って」

「いいわよ、兎を探すより早いでしょ？」

あの日。モロを失う事になったあの日以降、当然だが涉は人里に居られなくなった。

以来彼は、ここ迷いの竹林に住居を移している。

しかし彼は、自力でこの竹林を歩くことが出来ない。

故に、出歩く際にはいつも竹林住まいの兎達に案内をさせているのだ。

……時折、悪戯者の『兎詐欺』に悪さをされる事もあるが。

「ま、それもそうだな」

「……………」

努めて明るい調子の涉に、妹紅は少し眉尻を下げる。

そしてふと、立ち止まった。

「どうした？」

「……ねえ、渉」

彼女より数歩先で立ち止まり、振り返る渉。

妹紅は俯いていて、その表情は伺えない。

ただ、どこか哀しげだった。

……平気？

しばしの間を置いて、彼はそう問われた。

何が、等とは聞かない。

わかり切っていたから。

「正直に、包み隠さず言えば」

「うん」

「まったく平気じゃあない」

淡々と述べていたが、声が若干震えていた事を妹紅は聞き逃さなかった。

「モロが死んでもう半年だ。なのに、俺はあの時から何一つ進めない」

どんなに決意をしたって。

どんなに心を殺したって。

自分で自分を誤魔化し切る事など、出来なかった。

「憎い。人が憎い。この怨嗟が、どうしても振り切れない」

「涉……」

「努力はしてる。けど駄目だ……こんな事じゃ、死んだモロに申し訳が立たねえよ」

ふるふると頭を振る。

その仕草は、どこか疲れているようで。

「……………っ」

気付けば妹紅は、渉を抱き締めていた。

「お、おい妹紅……………」

「……………」

より強く抱き締められる。

離さない、とでも言わんばかりに。

渉は少々困ったように、うーとかあーとか呟いていたが、やがて

「……………ありがとな」

「……………うん」

ほんの少しだけ、抱き締め返した。

赤柄渉は、藤原妹紅に感謝している。

この幻想郷に来てからと言うものの、渉は妹紅に何度も助けられた。それは、命だったり心だったり。

妹紅が居なければ、彼はきっと今の彼ではなくなっていただろう。

しかし、だからと言って。

「ふわぁ……渉う……」

この状況はどうすべきか。

自宅にあった酒を振舞ったら、いとも簡単に酔っ払ってしまった

彼女を見て、渉は嘆息する。

「酒弱過ぎだろ……」

「うう？ 私はあ、酔ってなんかないもん……」

「酔っ払いは皆そう言う」

真っ赤になった顔、焦点の合わない濡れた瞳。

これで酔っていないなら、この世に酔っ払いは居ないと言えるほどの酔いっぷりだった。

「酔ってない……」

「はいはい」

「……暑い」

「脱ぐんじゃない馬鹿！」

「ふあ」

ついには衣服に手をかけようとした妹紅を、渉は布団に放り投げた。

「酔っ払いは寝てろ！」

「……んー」

言うが早いか、すぐに寝息を立て始める妹紅。

近付き、タオルケットを掛けてやる。

「……………」

夢でも見ているのか、小さく笑っている妹紅を見て、渉の顔にも笑みが浮かぶ。

手を伸ばし、その綺麗な白髪を撫でる。

「……妹紅」

ありがとう、お前にはいつも救われる。

優しく優しく、緩やかな手つきで髪を撫でる。

本当に綺麗だと、そう思った。

「……………」

思えば、何時からだろう。

つい最近だったかもしれない。

初めて会った時からかもしれない。

この美しい白髪に、今は閉じられている赤い瞳に、繰り出す炎に。

彼女の全てに、魅せられるようになったのは。

「妹紅……………」

ふっと窓の向こうを見る。

夜空に浮かぶ満月が覗いていた。

そんな月を見ながら、渉は呟く。

己の想いを。

「好きだよ、妹紅……………」

妹紅が実は起きていたことに涉が気付いたのは、これから数秒後だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5938v/>

東方恋短冊

2011年10月8日20時11分発行